

論文

李頎の士人描写詩について・補論

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati (Addendum)

川口喜治  
Yoshiharu KAWAGUCHI

本稿は、論者が以前に発表した李頎の士人描写詩に関する数篇の文章の補論である。前稿で論ずることができなかった作品をとりあげ、一連の拙論のひとまずの完結としたい。

前稿(一)においては、先秦から初唐までの士人描写詩の変遷を概観した。士人の姿は、唐以前においては、主に楽府や頌詞の中で歌われており、典型性が強く、幅広い読者層に共通理解が可能で、つまり公共的性質の強いものであった。初唐になると、そのような詩歌とともに、他者あるいは自己の一個人としての士人の姿を描く作品が多く作られ始める。ここには、詩歌の内容が、士人達共有の世界から、個別性・具体性が明確な世界を強く意識し始めるという、詩歌史の流れを確認することができた。

(二)においては、盛唐詩人の士人描写詩を概観し、盛唐詩人は、前代の士人達の成果を承け、個別性・具体性をよりいっそう強め、作者と描写対象の士人の置かれた状況に即して、士人達の姿を描いていたことが確認できた。

(三)(四)においては、杜甫の士人描写詩はこの分野においてひとつの達成であると同時に、李頎詩も杜甫詩と同等の成就を呈していることを確認した。そして従来少なくとも本邦では紹介されることがほとんど見受けられなかった李頎の士人描写詩について論ずることを通じて、杜甫中心の唐代詩史あるいは史観(そのようなものがあればの話ではあるが)、「杜甫だけではない」ことに些かなりとも補足できたのではないかと思っている。

(一)

本節と次節においては、前稿の補足として、李頎の士人描写詩について論ずる。論者が特徴的であると判断した作品はほぼ前稿で紹介できたと考えるが、

いま幾つかの作品を解説してゆく。

まず李頎から綦母潜に贈られた作品について考察する。李頎が綦母潜に贈った詩歌は七首を確認することができ、李頎の交遊相手のなかで最も多い。作品が逸失した可能性も大きく、現存の作品数だけで単純に判断を下すことは難しいが、綦母潜の次に多いのが前稿(四)で紹介した高適に対する二首であることを考えると、李頎と綦母潜との交遊はかなり深いものであったと判断される。その作品は、「送綦母三謁房給事」、「題綦母校書別業」(以上、『全唐詩』卷一三三)、「欲之新郷答崔顥綦母潜」(卷一三三)、「送綦母三寺中賦得紗燈」、「寄綦母三」、「奉送五叔入京兼寄綦母三」、「送五叔入京兼寄綦母三」(卷一三四)である。

また綦母潜は、張九齡、孟浩然、王維、王昌齡、儲光義、高適、韋応物らとの交遊が確認されており、盛唐詩人の交遊を考える上でも重要な人物のひとつであると判断される。

李頎と綦母潜の交遊の感情的側面は上掲の作品のうち特に次の二首から知ることができよう。

奉送五叔入京兼寄綦母三

01 雲陰帶殘日 雲陰りて殘日を帯び

02 悵別此何時 別れを悵む 此れ何れの時ぞ

03 欲望黃山道 黃山の道を望まんと欲すれども

04 無由見所思 思う所に見うに由なし

送五叔入京兼寄綦母三

01 吏部明年拜官後 吏部 明年 拜官の後

02 西城必與故人期 西城 必ず故人と期せん

03 寄書春草年年色 書を寄せん 春草 年年の色

04 莫道相逢玉女祠 道う莫かれ 玉女祠にて相い逢わんと

慕母潜の事跡については不明なところもあるが、開元十四年(七二六)の進士で、宜寿县尉(≡蓋原県、陝西省周至県)、集賢院待制、秘書省校書郎を歴任し、天宝のはじめ棄官し、十一載(七五二)前後に右拾遺となり、著作郎で終わったことがわかっている。慕母潜はそのキャリアにあって中央政府の官僚を歴任しており、李頎の二首は制作時が不明ではあるが、都で宮仕えをする慕母潜に宛てた作品と考えてよい。詩を託した「五叔」については未詳。

また王錫九『李頎詩歌校注』(注(5))によれば、この二首を同時の作とする版本も存在する。そうであるならば、李頎は五叔に託して、慕母潜への情意を込めた作品を、五言絶句、七言絶句という高い技巧が求められる詩型<sup>9)</sup>で届けたことになる。この手法に李頎の慕母潜に対する決して小さくはない思いの一端を確認することができるであろう。ちなみに右の王氏『校注』に採録された李頎詩一三二首のうち、五絶は二首にすぎず、七絶は八首で決して多くない。絶句を多作していない李頎がその詩型で慕母潜に詩を寄せたこと自体も、兩人の友情の深さを計る上で考慮されてもよいであろう。

次に二首について簡単に解説してみる。第一首の起句・承句は五叔との別れを描くが、転句・結句は慕母潜への思いを伝えている。「黄山」は漢の武帝が開いた大動植物園・上林苑内にあった<sup>10)</sup>。「黄山」が語彙として選ばれた理由はわからないが、黄山への道は長安への道を言う。「所思」は慕母潜であり、結句には李頎が彼と会うすべのない切なさが込められている。

第二首の起句、「吏部」での「拜官」は五叔と慕母潜の両者について言うと考えられるが、承句以下は慕母潜へ寄せた言葉である。「西城」には西方の町、町の西の両義があるが、ここは、李頎の居所である河南府潁陽県(河南省登封県西、前稿(一)参照)から見て西の町、長安を指す。転句は李頎が慕母潜に対して毎年毎年春の草の色の様子を手紙に書くからね、という意味であろうか。結句の「玉女祠」は、漢代に長安の西南の鄠県(陝西省戸県)にあった祠廟、あるいは唐代に華山の玉女峰にあった祠廟。いずれにせよ二人の再会に「玉女」、美しい「女性」は必要ない(「玉女祠」は長安の狭斜を象徴するのかもしれない)、男同士二人だけの再会を願っているのであろう。

このように、その内容は、五叔を送別する作品でありながら、その重心は慕母潜に寄せる言葉に置かれており、五叔つまり親族であるために気を遣わなくてよいという事情、絶句であり五叔について言葉を多く費やせないという理由があったにせよ、やはり李頎の慕母潜に対する浅くはない思いを見て取ることができるであろう。

さてその慕母潜の姿を李頎はどのように描いたかを確認してみる。「送慕母三謁房給事」を掲げる。

01 夫子大名下 夫子 大名の下

02 家無鍾石儲 家には鍾石の儲無し

03 惜哉湖海上 惜しい哉 湖海の上にあり

04 曾校蓬萊書 曾ては蓬萊の書を校す

05 外物非本意 外物は本意に非ず

06 此生空澹如 此の生 空だ澹如たり

07 所思但乘興 思う所は但だ興に乗り

08 遠適唯單車 遠く適くに 唯だ単車のみ

09 高道時坎坷 高道は時に坎坷たり

10 故交願吹嘘 故交は吹嘘を願う

11 徒言青瑣闥 徒に青瑣の闥を言い

12 不愛承明廬 承明の廬を愛まず

13 百里人戸滿 百里に人戸満ち

14 片言爭訟疏 片言に争訟疏らなり

15 手持蓮花經 手には蓮花の經を持ち

16 目送飛鳥餘 目には飛鳥の余を送る

17 晚景南路別 晚景 南路の別れ

18 炎雲中伏初 炎雲 中伏の初め

19 此行儻不遂 此の行 儻し遂げざらば

20 歸食蘆洲魚 歸りて蘆洲の魚を食らえ

詩題の「房給事」は杜甫とも関係があった房琯。恩蔭を以て入仕し、開元十二年に秘書省校書郎、二十二年に監察御史、途中左遷を経て、天宝元年に主客員外郎、三載に試主客郎中。五載に給事中に拔擢されるも、李林甫に構えられた李適之・韋堅と交遊があったため、翌六載、宜春(袁州)太守(治宜春県、

江西省宜春市)に左遷される。その後、地位を回復し、琅邪(沂州、治臨沂県、山東省臨沂県)、鄆郡(相州、治安陽県、河南省安陽市)、扶風の三太守を歴任し、十四載に憲部侍郎となる。十五載、安史の乱の時に玄宗の都落ちに駆けつけ、文部尚書、同中書門下平章事となる。

詩題が房琯を「給事」と称することから、本詩は天宝五載以降の作品であることは確かである。なお本詩を天宝五載、六載に繫年する説もあるが、<sup>15)</sup>確定はできないであろう。

さて第一・二句は、綦母潜が天下にその大いなる名声が知られているにもかかわらず、その家には少しの蓄えもなく貧窮していることを述べる。この第二句の貧窮に係る描写の意味については、渡辺信一郎氏の次の指摘が参考となる<sup>16)</sup>。渡辺氏は「士大夫層の生活を律してゆく最も重要な生活理念」として「清」を位置づけ、その具体的行動として「(一)俸禄・賞賜の散施、(二)産業を経営しないこと―「不営産業」、(三)家に余財のないこと―「家無余財」の三形態を挙げ、「清とは、俸禄・賞賜を宗族・旧故に散施し、産業を経営せず、家に余計な財を蓄えず、貧素な生活を旨とすることと規定して差しつかえないほどである」とする。また「六朝隋唐期にわたってこれらの事例は広汎に散見する」と述べ、併せてこの「清のイデオロギーは八、九世紀を境に急速に衰退してゆく」と論ずる。本詩に描かれた綦母潜の貧窮は渡辺氏が指摘する士大夫の生活規範である「清」の具体的生態に照らすならば、(三)に相当する(もちろんその背景として(一)(二)が想定される)。この視点から第二句を読むならば、この句は、綦母潜が第四句に描く秘書省校書郎という中央政府のキャリアを持ちながらも、余財を持たない清貧の生活をしていることに対する称賛と解せよう。実際には秘書省校書郎を務めたキャリアから考えると、貧窮の生活をおくっていたとは思われないが、以下の詩句から判明するように、この時綦母潜は官職に就いていなかったと考えられ、無禄であった。ここでは、その現況の描写が「家無余財」という「清」の規範と重ねられたことに注目すべきであろう。

前稿(一)で紹介したように李頎の生卒年が六九〇年(天授元年)から七五一年(天宝十載)前後、綦母潜が六九二年(如意元年)の生まれだとすれば、李頎と綦母潜は渡辺氏が指摘する「清」の規範が衰退してゆく境に生きたことになるが、その時期はまだ「清」の規範が消滅したわけではなく、士人達には共有されており、また却って衰退の過程をたどっているがゆえにいつそう伝統的、理想的

士人像が重要視され、第二句の描写につながったのだと考えられる。

さてここで前稿(四)において、論者は、李頎が高適に贈った「贈別高三十五」(卷一三三)冒頭二句「五十無産業、心輕百萬資。(五十にして産業無く、心は百万の資を軽んず。)」について、その上句が相手にとって不快である、触れて欲しくないと思われる経歴を歌っていると述べたが、渡辺氏の指摘に従うならば、上句の描写は「清」の(二)「不営産業」に相当し、さらに下句も(三)「家無余財」を別の側面から描写していることになる。してみると、前稿の論者の主張とは違って、この二句は高適に対する称賛ということになる。唐詩に描かれる士人の貧窮については更なる考察が俟たれよう。

第三句・四句は、すでに述べたようにかつて綦母潜が秘書省校書郎の任にあつたことと、現在は無官であることを言う。上句の「惜哉」は、綦母潜のキャリアに鑑みた場合、内実のある表白であろう。当時のエリートコースに八僞宰相にいたる最も典型的なキャリアパスがあり、それは、進士科の試験に及第↓秘書省校書郎(正九品上)↓畿県の尉(正九品下)↓御史台の監察御史(正八品上)↓中書省か門下省の拾遺(従八品上)↓尚書省の員外郎(従六品上)↓中書舍人(正五品上)↓中書侍郎(正四品上)↓ただちに宰相、であった。<sup>17)</sup>綦母潜の進士及最後の初任官である宜寿県(≡藍屋県)尉は畿県の尉であり、<sup>18)</sup>次いで秘書省校書郎に進んだのであるから、右の八僞と類似のエリートコースを綦母潜は歩んでいたことになる。しかし王維「送綦母秘書棄官還江東」(卷一二五)から判明するように、綦母潜は校書郎の官を棄てることになる。この棄官は既述の房琯の左遷と関係していると考えられている。<sup>19)</sup>

第五・六句は、上句の「外物」とは自己の心身の外にあるもの、富貴、巧妙、名利などのこと。下句の「此生」は綦母潜の人生の意味と解す。二句は辞任後無官の綦母潜の無欲恬淡な心的態度を表現している。ただ論者は実際には綦母潜が官を棄てることとなり、大切なものを失って茫然自失、世俗的栄達など考えたくもなく、心がかたっぽの状態であったことを暗に表現していると推測する。もし房琯の左遷、つまり李林甫と李適之・韋堅との権力闘争に巻き込まれて官を辞せざるを得なかったのであれば、エリートコースに乗っていただけに、その無念や失意が大きかったこと想像に難くない。

第七・八句は、上の二句のような精神状態にあつて「所思」(ここは綦母潜が心に思っていること)は、ひたすら興趣に任せて単独で(士人を友として連れず)

車に乗って遠出することであった。上の二句の慕母潜の心情の読みが妥当であるならば、この二句も、実際には政争の犠牲者としていわば人間不信に陥った人物がその心の傷を癒やすための自己治療を描いていると読めるのではないか。

第九句は、慕母潜が高い節操を持つものの、巡り合わせが悪く不遇であることを言うのであろうが、同時にエリートコース(高い道)は時として落とし穴があるという慕母潜の経歴に即したものである。第十句は、陥穽に落ちた慕母潜に房瑄が救いの手を差し出したことを言うが、実際には慕母潜から房瑄を頼ったのである。房瑄はこの時、宜春、琅邪、鄆郡、扶風のいずれかの太守にあつたと考えてよい。また房瑄を「故交」と称することから、慕母潜は房瑄に近く、その点からも彼の「棄官」は房瑄の左遷と関係していると考えられる。

第十一・十二句は、上句は、慕母潜が扉にくさりがたの彫刻を施した青い漆塗りの天子の宮門など言うに足りないことと考えている、下句は、慕母潜が「承明廬」に入り官吏になることを大切だと思っていないという意味であろう。この二句は、慕母潜が朝廷(中央政府)の官吏となることを望んでいないことを言う。実際に権力闘争の犠牲となつたであろう慕母潜にとつて、権謀術数渦巻く中央政府の官僚は懲り懲りだつたであろうし、それを李頎に表白していたのであろう。なお「承明廬」は、漢代、石渠閣の外にあつた侍臣の宿直所(廬)。そこから、承明廬に入ることが朝廷の官吏となることを意味する。また、應璩「百一詩」「問我何功德、三人承明廬。」張銑注「承明、謁天子待制處也。」(《六臣注文選》卷二二)とあることから、下句には慕母潜の集賢院待制の事跡が踏まえられている。

第十三・十四句は、上句が、慕母潜が「百里」つまり県の官僚を務めていた時、善政が行なわれており、民の家が満ちている、つまり逃戸がなかつたことを言う。下句は、訴訟も慕母潜の「片言折獄(一方の言い分を聞いただけで正しい判決を下す)」<sup>21)</sup>によってすぐに解決され、民衆の間に裁判沙汰がほとんどなかつたことを言う。

第十五・十六句は、慕母潜が法華経を手を持ち、飛び行く鳥を最後まで目で追う様子を描く。総じて、両句とも慕母潜が県の長官として肩をはらず、泰然自若たる態度であつたことを描いていよう。

上記四句は判明している限りでは慕母潜が進士及第後に就いた宜春県尉の経歴に基づいて描いていると思われる。そしてこの四句は、旅立つ慕母潜に対す

る称賛であるとともに、もうひとつの意図として、慕母潜の官僚としての有能さと人格の高潔さとを、房瑄に対して強調し推薦することがあつたと考えてよいだろう。つまりこの四句は、房瑄が慕母潜を僚佐に任じたならば、立派にその職務を遂行することが期待されるという意味を帯びているとも考えられる。末四句は別れの場の光景を描き、房瑄への拜謁の結果が思わしくなければ隠棲せよと勧めている。

総じてこの詩は、冒頭四句で慕母潜の人格と称賛すべきキャリア、次の四句で慕母潜の現在の心情と生活、続く四句で房瑄の推挙と慕母潜の中央政界に対する身構え、次の四句で慕母潜の官僚としての才能と心態、末四句で別れの情景と贈る言葉という構成になつている。

前稿(三)(四)で紹介したような士人の生態に係るおもしろい描写はさほど見ることはできないが、慕母潜と深い感情で繋がる李頎が、思慮を尽くして丁寧な友をいたわり、称賛し、また推薦する内容となつている。最後の慕母潜への隠棲の勧めは、房瑄に対してこのような有能な人格者を野に埋もれさせてはいけないという懇願とも読めよう。

続いて「寄慕母三」を掲げる。

- |            |                      |
|------------|----------------------|
| 01 新加大邑綬仍黃 | 新たに大邑を加えられるも 綬は仍お黄なり |
| 02 近與單車去洛陽 | 近く單車を与て洛陽を去る         |
| 03 顧眄一過丞相府 | 顧眄 一たび過ぎる 丞相の府       |
| 04 風流三接令公香 | 風流 三たび接す 令公の香        |
| 05 南川稷稻花侵縣 | 南川の稷稻 花は県を侵し         |
| 06 西嶺雲霞色滿堂 | 西嶺の雲霞 色は堂に満つ         |
| 07 共道進賢蒙上賞 | 共に道る 賢を進めば上賞を蒙ると     |
| 08 看君幾歲作臺郎 | 看る 君の幾歲にして台郎と作るを     |
- 第一句の「綬仍黃」は、「綬」は官職を表わす印を帯びるひもで、その色が黄色の場合、県の丞や尉などの官位の低いことを示す。慕母潜の任官をこのように表現するのは士人のキャリア描写を得意とする李頎らしいと考えられる。ともあれこの作品は、慕母潜が科挙及第後、宜春県尉への就任が決まつた時のものと見做して間違いない。してみると李頎は慕母潜とは、遅くとも慕母潜のキャリアが始まる頃からのつきあいであり、また二人の生年が既述の通り数年違いであることからすると、論者が上述した両者の深い友情はこのような背景

を基底とするのだろう。ところで李頎の科擧及第については、傅璇琮・譚優学氏の開元二十三年説が『唐才子傳』卷二・李頎「開元二十三年買季鄰榜進士及第。」を根拠としており、有力である。これに対して劉宝和氏は、『唐詩品彙』「詩人爵里詳節」が「開元十三年買季鄰榜進士」とすること、開元十三年前後に及第した王維（九年及第）、崔顥（十年）、綦母潜（十四年）、王昌齡（十五年）、盧象（十一年前後）が李頎と交遊を持つものに対して、二、三年及第の士人に李頎と交遊を持つものがないことを主な論拠として、開元十三年及第説を提示している。②④  
両説の検討は本論では行なわないが、傅氏・譚氏の説は根拠が極めて堅固である。ただ一方で、李頎と綦母潜との友情から推測すると科擧及第の時期もさほど離れていなかったのではないかと考えられ、この点から劉氏の開元十三年説も魅力があり、検討の余地があるものと思われる。

続く二句は、上句は、綦母潜が堂々とあたりを見回し、ひとたび宰相の役所を訪ねたことを描く。下句は、綦母潜が宰相の恩寵を受け、日中に三度もその香に接する謁見がなかったことを言う。この二句、綦母潜の得意をうまく伝えている。

第五・六句は、綦母潜の任地である宜寿県の描写と解す。末二句は、賢能の士を推薦すれば皇帝より最高のお褒めを頂戴するという慣習のもと綦母潜を推薦する士人がいて、綦母潜が数年のうちに「臺郎」（尚書郎。②⑤）ここでは宰相を言うのであろう）に昇ると激励する。

ところでこの詩の第二句に「單車」という語が使われている。この句は、エリートコースを歩み出した綦母潜が官僚となった証しとして馬車に乗って赴任するという颯爽とした描写である。一方、上掲の「送綦母三」詩の第八句にも「單車」が用いられていたが、ここでは綦母潜は孤独、失意の人として描かれている。李頎詩における「單車」の用例は綦母潜に贈った詩の二例のみであることを考慮すると、李頎は前者を意識して後者において意図的に「單車」を用いたのではなかろうか。つまり李頎詩にあつて、「單車」が綦母潜を象徴する記号となっているのである。そして「單車」＝綦母潜という関係性が保持されている以上、得意であれ失意であれ、綦母潜のアイデンティティーは揺るがず、綦母潜の存在を保証するという意図があるのだと論者は考える。平たく言えば、「送綦母三」詩にあつて「單車」が再び用いられたことにより、状況は変化しても、あの時の「單車の綦母潜」は揺るぎなく存在しているのだという慰めや励ましが

示されている。「送綦母三」詩の「單車」は深い友情に結ばれているからこそ理解できる言葉、一人にしかわからない暗号のようなものだったのではなかろうか（なお綦母潜詩には「單車」の用例は見当たらない）。

さて「寄綦母三」は進士に及第し畿県の尉を得てエリートコースを歩み始めた綦母潜に対する李頎の言祝ぎとなっている。既述の通り綦母潜は次に秘書省校書郎となつたように、その官途は順調であつた。李頎はその得意と後の蹉跌をよく知るからこそ、「送綦母三」詩において綴られた詩句は綦母潜に対する称賛、激励、配慮に満ちていたのだろう。それは同時に綦母潜の癒やしとなつていたに違いない。そしてそのような場合にあつては、前稿（三）（四）で紹介した士人のおもしろい生態描写は減殺されたのだと言える。

以上、前稿では紹介できなかった、李頎と厚い友情に結ばれた士人を描写した作品を一瞥した。

## （二）

本節では、李頎の士人描写詩として評価が高い「送陳章甫」（卷一三三）の解説を試みる。

陳章甫は、江陵（荊州治江陵県、湖北省江陵県）の人。嵩山に二十余年隠棲して学問を積み、開元中に制科に及第し、太常博士（従七品上）となつた。また天宝九載に亳州（治譙県、安徽省亳県）の糾曹（録事参軍事であつたことがわかっている。②⑥）『全唐文』（卷三七三）に文三篇が伝わる。これ以外の事跡はよくわからない。

陳章甫に係る詩歌は、本人のものは残っておらず、李頎に以下に紹介する二首、高適に二首があるのみである。まず李頎と交遊があつた高適の二首（李頎が高適に贈つた作品については前稿（四）参照は、「同羣公宿開善寺贈陳十六所居」同觀陳十六史興碑并序」（卷二二二）である。前者の開善寺は洛陽にあつた。また李頎の「宴陳十六樓枕金谷」（卷一三四）「西樓對金谷、此地古人心。（西樓は金谷に對い、此の地は古人の心なり。）」から陳章甫の居所は金谷に向かいあつており、その金谷は開善寺に近かつたらしいことがわかる。②⑦

高適の二首の詩の繫年は、諸説分かれる。孫欽善氏は、天宝四載に高適が李白らと洛陽に遊んだ時の作とする。一方で、周勛初氏・劉開揚氏は、彭蘭氏の説を襲い、乾元元年（七五八）、高適が太子少詹事であつた時の作とする。②⑧もし孫氏の説に従い、かつ李頎（李頎の卒年は早いもので天宝八載。前稿（一）参照）

の「宴陳十六樓」が同時の作であれば、李白、高適、李頎が顔を合わせた可能性もあり、盛唐士人の交遊を考える上で重要な資料となるであろう。

さて高適の「同觀陳十六史興碑」の序は次の通りである。

楚人陳章甫、繼毛詩而作史興碑。遠自周末、迨乎隋季、善惡不隱、蓋國風之流。未藏名山、刊在樂石。僕美其事、而賦是詩焉。

楚人陳章甫、毛詩を繼いで史興碑を作る。遠くは周末自り、隋季に迫り、善惡を隠さざるは、蓋し国風の流なり。未だ名山に蔵さず、刊みて樂石に在り。僕 其の事を美し、是の詩を賦す。

「樂石」は樂器にできる堅くて優れた石。続いて詩の本文を掲げる。

- |          |   |
|----------|---|
| 01 荆衡氣偏秀 | 荆衡 氣 偏 <small>ひと</small> えに秀で                     |
| 02 江漢流不歇 | 江漢 流れて歇 <small>や</small> まず                       |
| 03 此地多精靈 | 此の地 精靈多く  |
| 04 有時生才傑 | 時有りて 才傑を生む  |
| 05 伊人今獨歩 | 伊の人 今 獨歩し   |
| 06 逸思能間發 | 逸思 能く 間 <small>ま</small> ま発す                      |
| 07 永懷掩風騷 | 永懷 風騷を掩い  |
| 08 千載常屹屹 | 千載 常に屹屹 <small>こつこつ</small> たり                    |
| 09 新碑亦崔嵬 | 新碑 亦た崔嵬 <small>さいがい</small> たり                    |
| 10 佳句懸日月 | 佳句 日月を懸く  |
| 11 則是刊石經 | 則ち是 <small>こゝ</small> に石經を刊み                      |
| 12 終然繼禱杙 | 終然 禱杙 <small>とうぎ</small> を繼ぐ                      |
| 13 我來觀雅製 | 我れ來たりて雅製を觀れば                                      |
| 14 慷慨變毛髮 | 慷慨して毛髮を變す   |
| 15 季主盡荒淫 | 季主は荒淫を尽くし   |
| 16 前王徒貽厥 | 前王は貽厥 <small>いたずら</small> を徒にす                    |
| 17 東周既削弱 | 東周は既に削弱され   |
| 18 兩漢更淪沒 | 兩漢は更に淪沒す  |
| 19 西晉何披猖 | 西晉は何ぞ披猖たる   |
| 20 五胡相唐突 | 五胡は相ひ唐突す  |
| 21 作歌乃彰善 | 歌を作りて乃ち善を彰 <small>あき</small> らかにし                 |
| 22 比物仍惡訐 | 物に比して仍 <small>しな</small> に惡を訐 <small>あは</small> す |

23 感歎將謂誰 感歎 將に誰にか謂わんや  
24 對之空咄咄 之れに對して空しく咄咄たり

第十二句の「禱杙」は陳章甫の故郷である楚の春秋時代の歴史書。一説には諸惡を記して戒めとしたので、伝説中の凶惡獸である禱杙の名を冠したという。「史興碑」の完成を言祝ぐための作品であることを考慮しなければならぬが、この作品で陳章甫は、「繼毛詩而作史興碑。」「善惡不隱、蓋國風之流。」つまり美刺褒貶、諷諭という正統な儒教の文学思想を継承しようとする、「獨歩」孤高であり突出した才能の持ち主であったと描かれている。高適も陳章甫のこの事業に対しては、「慷慨變毛髮」髪が白くなるほどの感慨を持ち、「感歎將謂誰、對之空咄咄。」と、その感動を表現することの限界を告白している。

なお「史興碑」は逸してしまいその実態は不明であるが、序の「遠自周末、迨乎隋季、善惡不隱。」詩の第二・三句「作歌乃彰善、比物仍惡訐。」から憚ることのない、かなり直截な記述であったことが推測される。またその直截性が高適に末二句のような感慨、感嘆を抱かせたとも思われる。「史興碑」完成をめぐる本作品からは、陳章甫が忌憚のない言動をする人物、いわば直言直行の士であったことを窺うことができよう。

次に陳章甫のそのような生態を垣間見ることのできる挿話を掲げる。

舉人應及第者、關檢無籍者、不得與第。陳章甫制策登科、吏部放榜。章甫上書。昨見榜云、戸部報無籍者。昔傳說無姓、商后置于鹽梅之地、屠羊隱名、楚王延以三旌之位、未聞徵籍也。范雎改姓名爲張祿先生、秦用之霸。張良爲韓報讐、變姓名而遊下邳、漢高用之爲相。則知籍者、所以計賦耳。本防羣小、不約賢路。若人有大才、不可以籍棄之。苟無良德、雖籍何爲。「今員外吹毛求瑕、務在駁放、則小人也卻尋歸路、策藜杖、著草衣、田園芸蕪、鋤犁尚在。」所司不能奪、特請執政收之。「天下稱美焉。」

舉人の応に及第すべきに、関檢して籍無き者は、第を与うるを得ず。陳章甫 制策に登科し、吏部 放榜す。章甫 上書す。昨 榜を見るに、戸部 籍無き者を報ず、と云う。昔 傳説は姓無く、商后は塩梅の地に置き、屠羊は名を隠し、楚王は延くに三旌の位を以てし、未だ籍を徴するを聞かざるなり。范雎は姓を改め名を易えて張祿先生と爲り、秦は之れを用いて霸たり。張良は韓の爲に讐を報せんと、姓名を変えて下邳に遊び、漢高は之れを用いて相と爲す。則ち知る 籍なる者は賦を計る所以なるのみ。本

より群小を防ぐも、賢路を約めずと。若し人に大才有らば、籍を以て之れを棄つ可からず。苟も良徳無くば、籍ありと雖も何をか為さんや。今 員外は毛を吹きて瑕を求め、務めの放を駁するに在らば、則ち小人や却つて帰路を尋ね、藜杖を策つき、草衣をき著、田園に蕪を芸らん。鋤犁は尚お在り。所司は奪うこと能わず、特に執政に諮りて之れを収む。天下はこれを称美す。

この時の陳章甫の上書は、『全唐文』（卷三七三）所収の「興吏部孫員外書」にその全文を見ることが出来る。そこには

僕非敢隱籍名實。昨聞戸部檢報、似有參差。……若縁籍有誤、蒙袂而歸。亦何面目垂見巢由舊邱。

僕は敢えて籍の名実を隠すに非ず。昨 戸部の檢報を聞くに、參差有るに似たり。……若し籍に誤り有るに縁らば、袂を蒙りて帰らん。亦た何の面目をか垂れて巢由の旧邱に見えんや。

とあり、どうやら事の発端は、陳章甫が制科受験で届け出た籍貫に問題（戸部は「關檢無籍」照合調査の結果、届け出の戸籍に該当がない、虚偽少なくとも正確と判定したのであろう）があったようである。当時、新興の中下級の士人達が実際の生地ではなく一族の郡望を名乗ることが習慣となっていたことに關係した事案だったのである。一方、新興勢力の政界進出を止めようとする門閥貴族の牙城であった吏部は籍貫の正統性、由緒正しさを新興勢力排除のひとつの手段にしていたと判断される。

陳章甫は制科に及第するも戸部の戸籍調査において失格となるところを抗議の上書をして、役所を説き伏せ官職を勝ち取った。覚悟の上書であったと考えてよい。世論がそれを後押ししたことも引用末尾「天下稱美焉」から伺えるが、それは新興の士人層の声であったと考えられる。また「特諮執政」とあることから、大臣あるいは宰相クラスまでがかかわる案件となり、一大事件であったことがわかる。この挿話には新旧の勢力のせめぎ合いと交代の予兆を確認することができ、その意味でも興味深い。

「興吏部孫員外書」を全て解説する準備はできていないが、上の挿話に見える上書文からだけでも、故事を交えて理めめる陳章甫の強直、マチズモな思考を見て取ることができ、それは高適詩において覗くことのできた陳章甫の直言直行の生態と通底している。

さて、この陳章甫を李頎はどのように描いたのであるか。洛陽での作と考えられる「送陳章甫」（卷一三三）を掲げる。『唐詩三百首』に採られ李頎の諸作品の中では比較的著名である。なお前出の陳章甫「興吏部孫員外書」に「但僕一臥嵩邱、二十餘載。」とあり、「嵩邱（嵩山）」は李頎の居住地である潁陽と近いことから考えると、以前からお互いにその名を聞いていた可能性も否定できない。

- |            |                      |
|------------|----------------------|
| 01 四月南風大麥黃 | 四月 南風ふき 大麥黃なり        |
| 02 棗花未落桐陰長 | 棗花 未だ落ちず 桐陰長し        |
| 03 青山朝別暮還見 | 青山は朝に別れて暮に還た見る       |
| 04 嘶馬出門思舊鄉 | 嘶馬は門を出でて旧郷を思ふ        |
| 05 陳侯立身何坦蕩 | 陳侯の身を立つるは 何ぞ坦蕩たる     |
| 06 虬鬚虎眉仍大類 | 虬鬚と虎眉とに仍お大類          |
| 07 腹中貯書一萬卷 | 腹中に書を貯うる事 一萬卷        |
| 08 不肯低頭在草莽 | 肯えて頭を低れて草莽に在らず       |
| 09 東門酤酒飲我曹 | 東門に酒を酤いて我が曹に飲ませ      |
| 10 心輕萬事皆鴻毛 | 心は万事を軽るんずること皆な鴻毛のごとし |
| 11 醉臥不知白日暮 | 酔い臥しては白日の暮るるを知らず     |
| 12 有時空望孤雲高 | 時有りて空しく孤雲の高きを望む      |
| 13 長河浪頭連天黑 | 長河の浪頭は天に連なりて黒く       |
| 14 津口停舟渡不得 | 津口の停舟は渡るを得ず          |
| 15 鄭國遊人未及家 | 鄭國の遊人は未だ家に及ばず        |
| 16 洛陽行子空歎息 | 洛陽の行子は空しく歎息す         |
| 17 聞道故林相識多 | 聞道く 故林には相識多しと        |
| 18 罷官昨日今如何 | 官を罷むるは昨日 今は如何        |
- 冒頭二句はこの送別の季節の情景を描く。続く二句は、別れの場から見える青い山はずっと存在しており朝に別れても夕方にはその姿を見ることが出来るが、陳章甫を乗せていなく馬は出立してしまふと故郷を思つて歩み続け、送別する者はその姿をよはや見ることができない、という意味であろう。
- 第五句から十二句が陳章甫の人物描写となる。前半四句は外見を中心とし、後半四句は内面に焦点を当てた描写になっている。

第五句、「立身」は人となり、処世。「坦蕩」は度量が大きいことと物事にこ

だわりがなく自由気ままなことを言っている。第六句は陳章甫の容貌を描く。みづちのように長くて巻いた髭、虎のような長くて立派な鋭い眉毛、おまけに広くて高いひたいであると。この容貌について考えると、「虬鬚」は、杜甫「八哀詩 贈太子太師汝陽郡王璣」(卷三三三)に「虬鬚似太宗、色映塞外春。」とある。「虎眉」は『太平御覽』卷三六五・人事部六眉に「帝王世紀曰、文王虎眉。」「册府元龜」卷四四・帝王部四四・奇表に「周文王、龍顏、虎眉。身長十尺、胸有四乳。」とある。「大額」は語彙としては珍しいようだが、『南齊書』卷一・高帝本紀上に「太祖以元嘉四年丁卯歲生。姿表英異、龍顏鍾聲、鱗文遍體。」の「龍額(高くもりあがったひたい)」と同様であろう。つまり第六句は陳章甫の顔を帝王のそれと同じであると表現しているのであり、そのイメージは『史記』卷八・高祖本紀上に「高祖爲人、隆準而龍顏、美須髯、左股有七十二黑子。」と描かれる龍のような容貌であった劉邦を強く意識したものではなからうか。さらには、陳章甫には龍に加えて「虎」のイメージも加えられており、まさにこわいものなしの容貌として描かれている。

第七句は陳章甫の知識・教養の該博さを言う。第八句は陳章甫が頭をたれて野にあるべき人物ではないことを言う。

第九句以下の四句は、別れの場合ではなく、陳章甫の日頃の言動に取材された彼の常態を描いていると考えられる。すなわち陳章甫の豪快さ、孤高さを表現している賛辞である。そしてそれは、如上の直言直行、強行な態度が禍し、門閥貴族中心の雅な官界いぶるにおいて周囲に溶け込むことができなかつたゆえの孤独、孤立の精神の表出ではあるまいか。第九句は、陳章甫が日頃「私たち(李頎たち)」「友人に酒食をこ馳走していたことを描いていると読みたい。籍貫(家柄)という新興の中下級の士人達の官途における弱点を克服してみせた点で、陳章甫は彼ら士人層に一目置かれ、彼が催す酒席に集っていたのではなからうか。またそれが頻繁であったからこそ、陳章甫を特徴づける生感として詩句に描かれたと考へ得る。前掲の高適詩や李頎「宴陳十六樓」からもそれを覗い知ることができよう。第十句は世事万端に対してあくせくせず泰然と身構えていたという描写であろう。次の二句には、酒を酔いつぶれるまで飲み、時に空高く浮かぶ一片の雲(ここでは孤高の象徴である)を眺める姿が点描されている。これは、官界における孤立に起因する様々な憂愁をくつと胸に押し込む陳章甫のダンテイズムの表現であろうか。

ただ、憶測に過ぎないが、論者には、上の八句の陳章甫描写が、たんなる賛辞とは思えないのである。そこには官界においてのみではなく、新興の士人達とも上手く交際できない、居丈高さを観察することはできないであろうか。第六句に陳章甫の容姿が龍に加えて虎という皇帝に匹敵するイメージで描かれるのは彼の尊大ゆえのとつときにくさを表現しており、第七句の描写も博学多識を陳章甫自ら誇示していることに依拠する描写ではなからうか。第九句も読みよければ、陳章甫が士人達を半ば強引に酒席に誘ったのであり、第十句は全てのことに対してたかをくくつていたというふうにも読めよう。続く二句も周囲の者たちが話しかけることを拒絶するが如き姿である。

これら八句をそのような視点から読む時、高適詩から判別できた陳章甫の孤高とは別種のいわば(通俗的意味としての)唯我独尊的な生感を確認することができるのではなからうか。さらには、制挙での抗議の上書、『毛詩』の精神を継承し善悪を包み隠さず批判する史興碑の作成という行動自体にも、陳章甫のそのような生感を垣間見ることができないであろうか。

第十三句から十六句は別れの風景。上二句は、悪天候で黄河に高い波が立ち、渡し船も航行しなくなっていることを描く。下二句の「鄭國遊人」「洛陽行子」は、いまそれぞれ、陳章甫、李頎として解す。第十七句、「故林」は故郷だが、「郷里に」知人が多いことは当然であろう。それをこう述べるのは、逆に、郷里を離れた「官界に」は、上述のように、周囲に陳章甫を理解する者が少なかったということではなからうか。さらに知人が多いことも「聞道く」つまり伝聞であり、陳章甫の自述にのみ基づいていると思しい。ひいては李頎にとつては判断に迷う(信憑性が疑われる)という意図でこの言葉が用いられているとさえ思われるのである。知人に関わる別れの詩句として著名な王勃「杜少府之任蜀州」(卷五六)「海内存知己、天涯若比鄰。(海内に知己存せば、天涯も比隣の若し。)」や高適「別董大二首」其一(卷二二四)「莫愁前路無知己、天下誰人不識君。(愁うる莫かれ 前路に知己無きを、天下 誰人か君を識らざらん。)」は、たとえ発言者に確証はなくても、確信に満ちた信憑性のこもった言辞になっていることに間違いはない。これらと比較した場合、第十七句の不確定さ、信憑性の低さが照らし出されるだろう。

末句の「官を罷むるは昨日 今は如何」は、如上のストーリーに置かずとも素っ気なさは否めまい。官職辞任の経緯も尊大さと周囲との軋轢ではなかつ



たか。直情径行型の辞任であったとも思える。「今如何」は李頎が陳章甫に後悔しているのではないかと、腫れ物に触るよう慎重に尋ねる言葉と思われる。第十六句「洛陽行子」李頎の「空しく」なすすべない歎息には、新興士人達の弱点である籍貫の問題を突破したことによって得た官途を、その尊大さによって失ってしまった陳章甫に対する遺憾の念が込められている。

以上特に後半は、憶測と恣意による反証可能性のない解説に徹してしまった。論者の解説がはずれていないとすれば、旅立つ者へのはなむけのうたとして相応しくはないことも承知している。さらに、王氏『校注』が集めるこの詩に対する歴代の評語が本作品と陳章甫とに対して好意的なものとなっていることも反する。ただ敢えて弁解するならば、陳章甫はこの作品の、ひいては高適の作品の賛辞を表面的にのみ理解するタイプの人物であったのかもしれない。さらには、歴代のこの作品と陳章甫とに対する好意的な批評も、古典の文学共同体内における規範的、因習的な読み方である可能性も捨てきれないだろう。

ちなみに『全唐文』には陳章甫の「天寶九載七月十日日記」の「亳州糾曹廳壁記」が見える。上述の亳州糾曹という陳章甫の経歴はこれに依る。そして糾曹は録事参軍のことで、その職掌には、州県の官員の過失を糾弾することがあった。適材適所の任官が当時どのように実施されていたかはわからないが、如上の資料が伝える陳章甫像にかなう役職である。

さて李頎詩における士人描写全体を眺め回してみても、その生態が陳章甫のようにいわば剛直に描かれる例は、「別梁鍾」(前稿(三)参照)を除いてほかにないと言ってもよいであろう。そして、前掲の高適詩と比較した場合、李頎詩においては陳章甫の像が一層具体的に結ばれていることを確認できよう。

いったい李頎詩における士人描写は、描かれた人物の像が、個別・具体的に、生動的なものとして結ばれていることにその特徴があり、それがとりもおさず作品のおもしろさとなっていると、論者は考える。ここで描写対象の士人を一次テキストとし、それが言語化された詩歌を二次テキストと称することしよう。高適詩の場合は陳章甫の人物像の表現にあって、一次テキストを二次テキスト化＝言語化するとき、「精靈」「才傑」「獨歩」「逸思」のような抽象度の高い語彙を用いる、いわば三次テキスト化するような言語運用がなされている。つまり高適詩に描かれた陳章甫像と一次テキストの陳章甫とのへだたりは比較的大きい。それに対して、李頎詩の士人描写は一次テキストの二次テクス

ト化において抽象化の程度を低く抑えたままで、言語化しているところに、そのおもしろさの仕組みがあるのではなからうか。詩型や作詩背景などを棚上げにした場合、例えばその明確な違いを、陳章甫の才学をあらわす二句、すなわち高適詩の04「有時生才傑」と李頎詩の07「腹中貯書一萬卷」との間に見ることができようであろう。

つまり李頎詩にあっては、一次テキストが二次テキストと近い距離を保ちつつ読者の前に置かれる、読者が詩に描かれた人物を眼前に置いているが如き言語の運用が注意深くなされているということである。

ただここで論者は高適詩の価値を貶めているわけではない。古典の文学共同体内において定型として熟知された表現は、その定型・熟知の程度が高いほど、その場の感情(例えば、宴席の歓楽、事業への称賛、送別の悲しみ、故人の追悼など)を共感的、共有的に表現する装置として、一層有効に機能したと考えられる。この点、高適詩の陳章甫描写は、いま詳論の準備はないが、前掲の「精靈」「才傑」「獨歩」「逸思」のようないわば場に合った常套的な詩語の運用という意味で、古典詩歌の修辭の規範に忠実であったと考えてよいだろう。高適詩は、文学共同体内における言祝ぎの定型に寄り添うものであったのだ。そしてその定型を超越するという意味で、李頎は士人描写詩という分野で、中国古典文学の伝統的世界を切り開いて行ったのである。一方、高適は辺塞詩の分野でそれを行なったのである。

### (三)

さて李頎の士人描写詩のおもしろさを、一次テキスト(描写対象の士人)と二次テキスト(李頎詩)との距離の近さ、近接と考えた場合、それを明確に証明することは難しい。何故ならこの場合の一次テキストは生身の士人そのものであり、当然その典拠の全てを検証することはできないからである。また文献資料(これも二次テキストである)でその一端を検証しうる場合もあるが、その士人の生態の情報を最も多く伝える資料が李頎詩であることも多いのである。

そこで本節では、士人描写詩から題材を変えて、李頎詩における一次テキストと二次テキストとの近接について検討してみる。

李頎詩には神話、伝説、故事などから取材し、それを歌謡とした作品がいくつか存在する。「王母歌」「鮫人歌」「雜興」「絶纓歌」「鄭櫻桃歌」(卷一三三)などである。このうち『樂府詩集』に採られるのは「鄭櫻桃歌」だけであり、

それは「雜歌謡辭三」（卷八五）に収録されている。この樂府題を持つ現存する歌辭は李頎の作品のみであるが、解題によれば古辭が存在したようである。<sup>(4)</sup>ただそのほかの作品が新題の樂府（「雜興」も樂府題に近いと思われる）<sup>(5)</sup>であり、「鄭櫻桃歌」も李頎の作品のみしか判明していないことから、李頎独自のものに近いのではなからうか。ちなみに『樂府詩集』には「鮫人歌」の直前に李白オリジナルの「司馬將軍歌」が採録されている。総じて、如上の歌謡群は李頎の創出に係ると判断してよいだろう。

さて、上記の歌謡においては、一次テキストを西王母、鮫人、鄭櫻桃などにまつわる説話や故事を記した資料とすることができよう。そして生身の士人に行なうことが可能である。<sup>(6)</sup>（もちろんこのような説話や故事については、經書を代表とする權威ある書籍と比較した場合、逸失した文献や口碑資料の存在の可能性が大きいと推定しうるが、当然ながらそれらを検証対象とすることはできない。）

さて、ここでは「鮫人歌」を取りあげる。<sup>(7)</sup>以下、主に前掲の王氏『校注』に導かれながらこの作品を解読してゆくこととしたい。

まず王氏『校注』の王氏の按語には「本詩將《博物志》《述異記》《搜神記》有關鮫人的記述綜合起來創作、并且加以想像虛構、使故事情節更加完整、給人一種「眞實感」」（傍線：川口）とこの作品を評している。この「眞實感」は、「リアリティー」（現実、虚構を問わず、そのことが納得できる度合い）の「高さ」と訳してよいであろうか。そのリアリティーの高さは、一次テキストを至近距離で二次テキスト化し言語化することに通底するだろう。

- 01 鮫人潛織水底居 鮫人は潜れ織りて水底に居る
- 02 側身上下隨遊魚 身を上下に側てて遊魚に隨う
- 03 輕綃文綵不可識 輕綃の文綵は識る可からず
- 04 夜夜澄波連月色 夜夜の澄波は月色に連なる
- 05 有時寄宿來城市 時有りて寄宿せんと城市に來たる
- 06 海島青冥無極已 海島は青冥にして極已なし
- 07 泣珠報恩君莫辭 珠を泣して恩に報う 君 辭すること莫かれ
- 08 今年相見明年期 今年 相い見いて 明年に期す
- 09 始知萬族無不有 始めて知る 万族に有らざる無しと

10 百尺深泉架戶牖 百尺の深泉に戶牖を架く  
 11 鳥沒空山誰復望 鳥は空山に沒せば 誰か復た望まん  
 12 一望雲濤堪白首 雲濤を一望せば首を白くするに堪う  
 まず二次テキストたる「鮫人歌」を解読する前提として、一次テキストすなわち本作品の典拠と考へ得る資料を掲げる。なお王氏『校注』はこの歌の典拠資料として『博物志』『述異記』『搜神記』を引くが、ここではこの作品の第一次的、直接的な取材源と思しい類書『藝文類聚』『初學記』の記述は他と重複するので掲げない）、『文選』と李善注から、関連する記述を示すこととする。

●『文選』卷十二・木華「海賦」<sup>(8)</sup>  
 爾其爲大量也、則南滄朱崖、北灑天墟。東演析木、西薄青徐。經途溲溲、萬萬有餘。吐雲霓含龍魚、隱鯤鱗潛靈居。豈徒積太顛之寶貝與隨侯之明珠。將世之所收者常聞、所未名者若無。且希世之所聞、惡審其名。故可仿像其色、鬩鬩其形。

爾其水府之内、極深之庭、則有崇島巨鼈、崕峴孤亭。擘洪波、指太清。竭磐石、棲百靈。颺凱風而南逝、廣莫至而北征。其垠則有天琛水怪、鮫人之室。瑕石詭暉、鱗甲異質。  
 爾して其の大量爲るや、則ち南のかた朱崖を滄し、北のかた天墟に灑ぐ。東のかた析木に演び、西のかた青徐に薄る。經途 溲溲として、万万有余なり。雲霓を吐き龍魚を含み、鯤鱗を隠し靈居を潛す。豈に徒に太顛の寶貝と隨侯の明珠とを積むのみならんや。將た世の収むる所の者は常に聞き、未だ名あらざる所の者は無きが若し。且つ希世の聞く所、惡んぞ其の名を審らかにせん。故に其の色を仿像し、其の形を鬩鬩す可し。  
 爾して其の水府の内、極深の庭には、則ち崇島・巨鼈有りて、崕峴と孤亭つ。洪波を擘き、太清を指し、磐石を竭き、百靈を棲ましむ。凱風を颺げて南に逝き、廣莫至りて北に征く。其の垠には則ち天琛・水怪、鮫人の室有り。瑕石の詭暉たるあり、鱗甲の異質なるあり。

●『文選』卷十二・郭璞「江賦」  
 爾其水物怪錯、則有潛鵠魚牛、虎蛟鉤蛇、……三蛟蝦江、鸚螺蛇蝸、……淵客築室於巖底、鮫人構館于懸流。  
 爾して其の水物の怪錯は、則ち潛鵠・魚牛、虎蛟、鉤蛇……三蛟、蝦江、鸚螺、蛇蝸有り。……淵客は室を巖底に築き、鮫人は館を懸流に構う。

●『文選』卷五・左思「呉都賦」

其荒陬譎詭、則有龍穴内蒸、雲雨所儲。陵鯉若獸、浮石若桴。雙則比目、片則王餘。窮陸飲木、極沈水居。泉室潛織而卷綃、淵客慷慨而泣珠。開北戸以向日、齊南冥于幽都。

李善注「水居、鮫人水底居也。俗傳鮫人從水中出、曾寄寓人家、積日賣綃。綃者、竹孚兪也。鮫人臨去、從主人索器、泣而出珠滿盤、以與主人。」

其の荒陬の譎詭には、則ち龍穴有りて内に蒸し、雲雨の儲うる所なり。陵鯉は獸の若し、浮石は桴の若し。双べるものは則ち比目、片なるものは則ち王餘。窮陸に木を飲み、極まり沈んで水に居る。泉室に潜れ織りて綃を卷き、淵客は慷慨して珠を泣す。北戸を開きて以て日に向かい、南冥を幽都に齊しくす。

李善注「水居は、鮫人の水底に居るなり。俗に伝う、鮫人は水中從り出で、曾ち人家に寄寓し、日を積ねて綃を売ると。綃は、竹の孚兪たるなり。鮫人去るに臨み、主人從り器を策め、泣して珠を出して盤に満たし、以て主人に与う。」

※李善注の「竹孚兪也。」はよくわからない。「孚兪」は「孚瑜」のことであろうか。ならば、『初學記』卷十九・人部下・美婦人「何承天纂文云、孚瑜、美色也。」とあり、美しいいろいろという意味になる。

●『藝文類聚』卷六五・産業部上・織

搜神記曰、南海之外有鮫人。水居如魚、不廢績織。

搜神記に曰く、南海の外に鮫人有り。水に居ること魚の如く、績織を廢めず。

●『藝文類聚』卷八四・寶玉部下・珠

搜神記曰、南海之外有鮫人。水居如魚、不廢績織。其人能泣珠(其の人能く珠を泣す)。

次に「鮫人歌」を上記の取材源に照らし合わせて解説してみる。

第一・二句は、まず「鮫人(諸辞書では「人魚」と訳すが、実態は未詳。鮫は蛟で、龍の一種)」の最も特異な生態である水中での生活と紡織とが紹介される。

第一句「鮫人潛織水底居」は「呉都賦」の「極沈水居。泉室潛織」、その李善注「水居、鮫人水底居也。」「類聚」所引「搜神記」などに依拠して作られている。第二句は上記の取材源には見当たらないが、王氏「校注」に言う「想像虚構」つまり典拠資料に見られないと言う意味での作者の創作であると考えら

れる。

第三・四句は、第一句の紡織でできたあやぎぬが極めて珍奇で美しいことが描かれる。第三句の「輕綃文綵」は「呉都賦」「卷綃」と李善注「綃者、竹孚兪也。」に依拠し、「不可識」(想像もできない)は「海賦」「將世之所收者常聞、所未名者若無。且希世之所聞、惡審其名。(世の人の手に収められたものは有名になるが、まだ名の知られていないものは、ないのと同じである。また、世にまれなものはあまり人の耳にも入らないから、その名が知られていないのも無理はない。したがって、その色も形もはっきりしないのである。)」をイメージの基盤としていであろう。第四句は李頎の創作で、あやぎぬの美しさを、夜ごとに澄んだ波と月の光が連なるようにだと形容する。

第五・六句は、鮫人が人間と交流することを中心に描かれる。第五句「寄宿來城市」は「呉都賦」李善注の「俗傳鮫人從水中出、曾寄寓人家」に拠る。なおこの交流は、実際には李善注に「積日賣綃」とあることから海人と陸人の交易であったと判断される。第六句「海島青冥無極已」は「海賦」「呉都賦」に描かれる鮫人の住みかが世界(海)の「極已」果てにあるというイメージを結晶させたもので、直接的には「海賦」「其垠則有天琛・水怪、鮫人之室。」に基づいていよう。

第七・八句は「珠」が至宝であることに焦点を当てて描かれる。第七句「泣珠報恩君莫辭」は「呉都賦」李善注「鮫人臨去、從主人索器、泣而出珠滿盤、以與主人。」「類聚」卷八四所引の「搜神記」「其人能泣珠。」に拠る。「報恩」は右の李善注に記された鮫人が宿を貸した主人にお礼をするという生態を圧縮したものである。第八句は李頎の創作である。

第九句から十二句は、作者が顔を覗かせた感想あるいは評語のような詩句となっている。第九句「始知萬族無不有」は上記の「海賦」「將世之所收者常聞、……惡審其名。」を反転させている。第十句の「百尺深泉」は「呉都賦」「極沈水居」「架戸牖」は江賦「鮫人構館」、呉都賦「海賦」「鮫人之室」から発想された表現であろう。

末二句については、論者にはその意味がよくわからない。鮫(龍)人という海底の住人と末句の「白首」という素材からすぐに想起されるのは、我が国の浦島太郎の説話であるが、末二句は浦島説話から解説しうる悠久な時間の経過と関係しているのだろうか。

以上のように、「鮫人歌」は異類である鮫人の不可思議な生態について描かれたものである。作品には、諸文献に見られる鮫人の生態の特徴を明確に伝えるかたちで、肝要な語彙が比較的原型を保ちつつ詠み込まれていると言えよう。繰り返しになるが、士人描写詩の描写対象の士人を一次テキストとするならば、ここでは鮫人にまつわる説話が一次テキストとなる。そして如上の解説から、本作品が鮫人説話という一次テキストと近接したかたちで二次テキスト化<sup>11</sup>言語化されたものになっていることが確認できたのではなからうか。それは、先に指摘したように李頎の士人描写詩において、描写対象の士人という一次テキストとの距離を近接したかたちで二次テキスト化されるといふ仕組みに相通ずると考える。

換言すれば、士人描写詩の解説では一次テキストたる士人について全てを検証することはできないのに対して、「鮫人歌」の解説では、典拠資料ここでは諸文献に見られる鮫人説話を一次テキストとして検証することができた。それを通じて一次テキストと二次テキストが近接する作詩手法を確認でき、そこから士人描写詩における同様の手法を類推した、ということである。

また「鮫人歌」は、「海賦」「呉都賦」に描かれた「世界(海)の果て」の幽遠なイメージを通奏低音として、鮫人の水中での生活と紡織↓鮫人の織り出す珍奇なあやぎぬ↓陸の人間との共同生活(交易)↓涙珠によるお礼↓感想・評語のように構成され、且つそれらはひとつの物語をなすように効果的配置されていると言えよう。つまり、「鮫人歌」は、典拠資料に見える鮫人にまつわる特異な題材を、王氏『校注』が指摘するように典拠には見えない作者・李頎の「想像虚構」を交えて、巧みにコラージュした作品であると評価することができよう。「鮫人歌」はあたかも日本の昔話を歌った童謡のようでもある。

このように考えた場合、李頎詩における士人描写のおもしろさの要因の一つが、描写対象の士人にかかる容貌、言動、逸話などの中から、その姿を個性的に描写するのに効果的な特徴や特異な出来事を選び出し、それらを巧みにコラージュしていることに在るとも言えるのではなからうか。

なおここで断わっておきたいのは、論者は、李頎の士人描写詩に描かれた士人たちの姿が実像そのままであると述べているわけでは決してないということである。「鮫人歌」に作者・李頎の「想像虚構」が交えられていたように、士人描写詩に描かれた士人の姿にあっても同様の創作はもちろん想定されるので

ある。ちなみに一次テキストの二次テキスト化<sup>12</sup>言語化は一般的に言っても「想像虚構」を回避できないものであると考える。

川合康三氏は、韓愈詩における孟郊・盧仝の描写について「二人の人物の描き方に共通しているのは、いずれも現実にもとづきながらも、それを肉付けし、小説的なふくらみをもたせて人間を彷彿とさせていることだ。」(傍線・川口)と指摘する。<sup>13</sup>川合氏の言い方を借りるならば、李頎詩の士人描写のおもしろさにも、もちろん「小説的なふくらみ」を考慮すべきであると思われる。そして本節冒頭に掲げた李頎の「鮫人歌」「王母歌」などは「小説」(もしくはそれに類似する故事)を典拠としており、これらの詩歌と士人描写詩のおもしろさは「小説(的なふくらみ)」という点で通じていると考えられる。そして更に言うならば、それは樂府の叙事的、物語的なおもしろさに通ずる点もあると考えられる。

ところで鮫人説話を主題とした詩歌は、唐前詩・唐詩において下に掲げる作品一例を除いて、李頎の「鮫人歌」のみである。それは、鮫人説話を典拠とすることがいゆる僻典の使用と見做されたのが大きな理由であろう。それ故、李頎も樂府題という仮構の枠組みに頼らなければ、この題材を詩歌とすることはできなかつたのではなからうか。

また「鮫人」という語彙は『文選』に「海賦」「江賦」を含めて三例あり、<sup>14</sup>それ自体の使用は規範を逸脱していなかつたであろうが、僻典に見える語彙であるためであろう(それ以前に、詩歌の主要なテーマである山水自然、友情、別離、望郷、隱逸、孤独、出征などを歌う詩語としては相応しくないのだが)、唐以前の詩歌において「鮫人」の用例は樂府に一例を確認しうるだけである。<sup>15</sup>唐代になってこの語が散見されるようになるが多くはない。初唐では李嶠に一例を確認できるのみである。李頎と同時代の盛唐では、孟浩然、儲光羲、岑参にそれぞれ一例を、杜甫に四例を確認することができる。<sup>16</sup>

辺塞詩において幻想的な西域の情景を描いた岑参も、「鮫人」に対しては、次の如く素っ気ない描写で終わっている。「送楊瑒尉南海」(卷二〇〇)「不擇南州尉、高堂有老親。樓臺重蜃氣、巴里雜鮫人。海暗三山雨、花明五嶺春。此鄉多寶玉、慎莫厭清貧。(扱はずして南州の尉たるは、高堂に老親の有ればなり。樓台には蜃気重なり、巴里には鮫人雜う。海は三山の雨に暗く、花は五嶺の春に明るし。此の郷 宝玉多し、慎んで清貧を厭う莫かれ。)

また杜甫詩に「鮫人」を四例確認できるが、描写としては上記用例の域を出てはいないと判断される。推測ではあるが、杜甫が「鮫人」を詩語として他の詩人に比べて多く用いたのは、『文選』、李善注、類書以外に、何らかの機会に李頎の「鮫人歌」を読み、影響を受けたのかもしれない。

さて上述したように李頎詩と同様に鮫人説話を主題として歌うのはわずかに一例、康翊仁「鮫人潜織」(卷七八〇)が見出されるのみである。以下に掲げよう。

珠館馮夷室 珠館は馮夷(黄河の水神、河伯)の室にして

靈鮫信所潛 靈鮫の信に潜む所なり

幽閒雲碧牖 幽閒たり深く隔たる雲碧の牖

混漾水精簾 混漾たり(光ゆらめく)水精の簾

機動龍梭躍 機動きて 龍の梭(機織り道具)躍り

絲繁藕滓添 糸繁りて 藕の滓添う

七襄牛女恨 七襄(星が一日に七たび移る)は牛女の恨む

三日大人嫌 三日も(三日で織り終えても)大人(姑)の嫌う

透手擊吳練 透手は吳練を撃ち

凝冰笑越縑 凝冰は越縑に笑う

無因聽札札 札札たる(機織りの音)を聴くに因無く

空想濯織織 空しく濯ぐことの織織(女性のか細い手の様子)たるを想う

作者については未詳。李頎詩との安易な比較は慎重を期さねばならないが、この作品は「鮫人潜織」と題して幻想的に鮫人の世界を描いてはいるものの、そこからは鮫人の生息自体はほとんどその像を結ばない。もとより鮫人の生息の描写を志向した作品ではないとは判断されるが、同じ説話をモチーフとしながら、李頎が鮫人の姿を描き出した手法とは明らかに異なる。このような比較からも、李頎詩における、描写対象の生息の活写という性質、一次テキストへの近接という傾向を確認できるのではなからうか。

さらに李頎が鮫人説話を主題とし、楽府題という仮構の枠組みに依りながら物語的な歌謡として鮫人の生息を描写したことは、李頎が(異類も含めて)生息の観察と観察結果の記録とを、詩歌制作において追求していたということを示していると考えられる。

(四)

以上、本稿においては、前稿で論者が気付かなかった点、論ずることができ

なかったことをまじえて、李頎詩における士人描写について補論を試みた。特に前稿において答えが出せなかった李頎詩の士人描写のおもしろさの仕組みについては、一次テキストと二次テキストの近接という観点から、些かなりとも仮説が提出できたのではないかと思う。

最後に前稿、本稿ともに川合康三氏の『中国の自伝文学』(創文社、一九九六年)にも大きな啓発、教授を受けていた。川合氏は同書の「IV 詩の中の自伝」において、杜甫の自伝詩論者は前稿で「自述詩」としたについて「無名の、ごく普通の人間を対象としているところが新しい。歴史上の典型人物ではない、しかし輪郭のはっきりした顔立ちを持った人物が登場するのである。」「杜甫を受けて、ふつうの人間の自伝的な詩は、中唐に入ってから作られるようになる。」「(二一七頁)。また他者を描いた詩歌について「韓愈は従来の人間の型には存在しなかったような人間像を作りあげた。……その背後に人間を多様なものとして捉える新しい人間観が、新しい時代の認識としてあったからであろう。さかのほればそれは杜甫に淵源するだろう。」「(二二五―六頁)と説く。

論者はそれらに異議はない。ただ、いま李頎の生年が六九〇年、杜甫の生年が七二二年とするならば、二人の二十年余りの年齢差は決して小さいとは言えないであろう。李頎と杜甫との交遊、文学的な影響関係を紐解く準備はできていないが、前稿、本稿で論じた李頎詩における士人描写を眺めた場合、川合氏が指摘する淵源としての杜甫のさらなる淵源に李頎を想定しうるのではないかと、論者は考える。

また川合氏は同書「III かくありたい我」(一一一頁)において次のように述べる。「われわれの知りうるのは歴史という全体の中の点に過ぎないことが改めてわかる。点の存在はそれを含み込む線、さらには複数の線によって構成される面があったことを推測させる。過去を対象とする研究では、わずかに残された点を手がかりに線や面を復元し、その広がりの中で実際に見られる点の位置、意味を考えていかねばならない。」

前稿と本稿が、士人描写詩の系譜という線、そして盛唐の士人描写詩という面において李頎が杜甫と共に突出していたことを示すことが些かなりともできていると思ふ。

【注】

- (1) 「李頎の士人描写詩について」(一)～(四)。(二)～(三)は『山口県立大学国際文化学部紀要』二二・二三(二〇一六・一七年)、(四)は『山口県立大学院論集』十七・十八(二〇一六・一七年)。以下、前稿または前稿(一)のように記す。
- (2) 吳汝煜『唐五代人交往詩索引』(上海古籍出版社、一九九三年)による。
- (3) 本稿で引用する唐詩は、『全唐詩』(中華書局、一九六〇年)により、その巻数を示す。
- (4) 注(2)。
- (5) 以下李頎詩の解釈は、王錫九『李頎詩歌校注』(中華書局、二〇一八年)を主として、劉宝和『李頎詩評注』(山西教育出版社、一九九〇年)、羅琴・胡嗣坤『李頎及其詩歌研究』(巴蜀書社、二〇〇九年)を参考にしている。
- (6) 以下、特に問題がない限り、周祖譔『中国文学大辞典 唐五代卷』(中華書局、一九九二年)に拠る。なお『集賢院待制』を『辞典』は『集賢院直学士』とするが、ここでは慕容潜の伝記に係る諸資料に従い、『待制』とする。つまり集賢院で「仮雇い」となり、その後、正式に秘書省校書郎に就任したのである。
- (7) 注(5)の諸注釈は解かないが、この「五叔」は、前稿(四)で紹介した「春送従叔遊襄陽」(卷一三三)の「従叔」(父の従兄弟で父より年下の老)の可能性もある。該詩の第三・四句に「向用五経笥、今爲千里行。」とある。上句は従叔がその「五経笥」、五経に精通する博識によって官として勤務していたことを描く。下句は、その従叔が今は襄陽に向けて「千里」の旅路を行くことになったことを言う。「千里」は詩的表現で、居るべき場所から遠く離れる遺憾を表現しているようが、実際にも『舊唐書』卷三九・地理志二に「襄州緊上。……在京師東南一千一百八十二里、至東都八百五十三里。」とあることから、襄陽に旅立つ従叔のもとの勤務地は都であった可能性は高いであろう。さらには李頎詩の「吏部明年拜官後」が五叔についても言うのであれば、それは「五経笥」に係る職に就任することであると推測される。
- (8) 南京図書館蔵明朱警編・嘉靖年間刻本『唐百家詩』は「送五叔……」詩の題下に「二首」と記す。同図書館蔵明万曆丙戌凌登瀛彙輯・吳敏道刻本は
- 二首を一首として七言古詩に分類し、題下に「別本作二首」と注する。
- (9) 高島俊男『漱石の夏休み』「木屑録をよむ」(朔方社、二〇〇〇年)によれば、律詩、古詩、絶句の順で難易度が高くなる。
- (10) 揚雄「羽獵賦」序(『文選』卷八)「武帝廣開上林、東南至宜春鼎湖御宿昆吾、旁南山西、至長楊五柞、北繞黃山、濱渭而東、……」。『漢書』卷二八上・地理志上・右扶風「槐里、周曰犬丘、懿王都之。秦更名廢丘。高祖三年更名。有黃山宮、孝惠二年起。莽曰槐治。」
- (11) 『漢書』卷二五下・郊祠志下「京師近縣鄠、則有勞谷、五牀山、日月、五帝、僊人、玉女祠」。杜甫「望岳」「西岳峻嶒竦處黃尊、諸峯羅立似兒孫。安得仙人九節杖、拄到玉女洗頭盆。」仇兆鰲注「集仙錄、明星玉女居華山、服玉漿、白日升天。祠前有五石臼。號玉女洗頭盆。其水碧綠澄徹、雨不加溢、旱不減耗。祠有玉女馬一匹。」(『杜詩詳註』卷六)。
- (12) 『資治通鑑』卷二一五による。
- (13) 譚優学「李頎行年考」(『唐詩人行年考』、四川人民出版社、一九八一年)は天寶六載、傅璇琮『唐才子傳校箋』卷二・慕容潜(陳鉄民担当。中華書局、一九八七年)は五載とする。
- (14) 渡辺信一郎「清一あるいは二一七世紀中国における一イデオロギーの形態と国家」(『京都府立大学学術報告 人文』三一、一九七九年)。
- (15) 小川環樹『唐詩概説』(岩波書店、一九五八年)。
- (16) 秘書省の雅称は「蓬萊閣」、「蓬閣」であるが、それについては『大唐六典』卷十・秘書省・校書郎「後漢書云、馬融、安帝時爲大將軍鄧騭召拜校書郎中、在東觀。……太僕鄧康重章學行、是時學者稱東觀爲氏藏室、道家蓬萊山。」
- (17) 礪波護「唐の官制と官職」(小川環樹『唐代の詩人』所収、大修館書店、一九七五年)。
- (18) 『新唐書』卷三七・地理志一・鳳翔府扶風郡「盤屋。本畿、隸雍州。武德二年析置終南縣、貞觀八年省、天寶元年更名宜壽、至德二載復故名、乾寧中隸乾州、天復元年來屬。」
- (19) 王維詩の繫年について、陳鉄氏は、房琯の左遷に関係させて、注(13)『校箋』「慕容潜」で天寶六載、『王維集校注』卷三「送慕容校書棄官還江東」(中華書局、一九九七年)では五載とする。
- (20) 県は百里四方。『漢書』卷十九上「百官公卿表上」縣大率方百里。其民稠則減、

- 稀則曠。郷、亭亦如之、皆秦制也。」
- (21) 『論語』顔淵「子曰、片言可以折獄者、其由也與。」何晏集解「孔曰、片、猶偏也。聽訟必須兩辭以定是非、偏信一言以折獄者、唯子路可。」
- (22) 『漢書』卷八三・朱博傳「既白駕辦、博出就車見自言者、使從事明敕告吏民、欲言縣丞尉者、刺史不察黃綬、各自詣郡。」顔師古注「丞尉職卑、皆黃綬。」
- (23) 注(13) 譚氏「行年考」は、綦母潛が進士に及第した開元十四年の作とする。傅璇琮「李頌考」(『唐代詩人叢考』、中華書局、一九八〇年。いま、二〇〇三年版による)は、開元十五年から十八年の作とする。進士科及第後に吏部銓選まで守選期間があるので、書判拔萃科などの合格即授官のバypass試験に合格していない限り、譚氏の説を採るには慎重を要する。
- (24) 譚氏・傅氏の説は注(13)。劉氏は注(5)『評注』所載の「李頌事迹考」。各士人の科擧及第年は劉氏に従う。
- (25) 『易經』晉「晉。康侯用錫馬蕃庶、晝日三接。」孔穎達疏「晝日三接者、言非惟蒙賜蕃多、又被親寵頻數、一晝之間三度接見也。」
- (26) 孔融「薦禰衡表」「近日路粹、嚴象、亦用異才、擢拜臺郎、衡宜與爲比。」呂延濟注「路粹、嚴象、漢末時人。皆以高才擢拜尚書郎。言衡之才可與此數子爲比用者也。」(『六臣注文選』卷三七)。
- (27) 王氏「校注」はこの詩に対する歴代の高い評価を載せ、王氏自身も「按語」で「此詩爲李頌人物素描詩中的名篇。」と評す。
- (28) 王氏「校注」による。
- (29) 劉開揚『高適詩集編年箋註』(中華書局、一九八一年)による。
- (30) 順に、孫氏『高適集校注修訂本』(上海古籍出版社、二〇一四年)、彭氏「高適繫年考証」(『文史』三、一九六三年)、周氏『高適年譜』(上海古籍出版社、一九八〇年)、劉氏「高適年譜」(注29)『箋註』所収)。
- (31) 『古文苑』卷一「嶧山刻石文」「今皇帝壹家天下、兵不復起。……羣臣頌略、刻此樂石、以著經紀。」章樵註「石之精堅堪爲樂器者。如泗濱浮磬之類。」
- (32) 明・張萱『疑耀』卷四・櫛机「櫛机、惡獸。楚以名史、主於懲惡。又云、櫛机能逆知未來。故人有掩捕者、必先知之。史以示往知來者也。故取名焉。亦一説也。」(『四庫全書』)
- (33) 周勛初『唐語林校証』卷八(中華書局、一九八七年)。同じ挿話は早くは『封氏聞見記』卷三・制科に見える。引用の□内は『封氏聞見記』により補った。
- (34) この詩の解釈は、目加田誠『唐詩三百首1』(平凡社、一九七三年)を参照した。
- (35) 次の用例があった。『大唐西域記』卷十一「故師子國人、形貌卑黑、方頤大額。性情獷烈、安忍鳩毒。斯亦猛獸遺種。」、『太平御覽』卷七三〇・方術部十一・相中「(初唐・丘悅『三國典略』)又曰、……齊文宣、字子進、神武第二子也。……及長、黑色、大頤兌下、鱗身重蹠、瞻視審定、不好戲弄、深沈有大度。」なお『北史』卷七・齊本紀中では「大頤兌下」とする。
- (36) 『索隱』「李斐云、準、鼻也。始皇蜂目長準、蓋鼻高起。爾雅、顔、額也。文頤曰、高祖感龍而生、故其顔貌似龍、長頸而高鼻。」
- (37) 王氏「校注」は、『世說新語』排調「郝隆七月七日出日中仰臥。人問其故。答曰、我曬書。」を典拠として示す。
- (38) 李頌「宴陳十六樓(樓枕金谷)」(『西樓對金谷、此地古人心。白日落庭内、黃花生澗陰。四鄰見疏木、萬井度寒砧。石上題詩處、千年留至今。』)
- (39) 川合康三「中国のアルバー系譜の詩学」(『あとがき』汲古書院、二〇〇三年)「古典文學の時代には、何よりもまず様式に沿い、文學的因襲に従うこと、それが文學たりのために必要な条件でした。川合「規範と表現」『文選』詩の初めの部立てを中心に」(『東方学』一三二、二〇一六年)に「規範にかなうことよって作品は文學作品としての安定を獲得する。作品は規範を共有する文學共同體のなかで文學として認知される。それが古典文學というものであった。」とある。また川合「半夜鐘」(『中国のアルバ』)は「作者が讀者に要求する詩の讀み方、それは詩を成り立たせている文學環境のなかで無言のうちで成立している枠組みである」「文學的因襲のなかにある讀者は、因襲の體系のなかに組み込まれている。讀者という獨立した存在はなく、文學的因襲だけが自立しているのである。」と述べる。文學作品を作るだけでなく、読むことにおいても、様式、因襲、規範があったという指摘は重要である。
- (40) 呂宗力『中国歴代官制大辞典修訂版』(商務印書館、二〇一五年)。
- (41) 大室幹雄「桃源の夢想—古代中国の反劇場都市」第一章「都市の解体学」六一頁(三省堂、一九八四年)を私なりに解釈し参考にした。
- (42) 内田樹「おじさん」的思考」二〇三頁(二〇一一年、角川文庫)を私なりに解釈し参考にした。また注(39)も参考にした。
- (43) 川合康三「文選(一)」『解説』(岩波書店、二〇一八年)「概して規範なる

ものは規範に過ぎず、創造的な言語表現は規範を基盤としながら、いかに規範と格闘したか、いかに規範を乗り越えたか、そこに開けてくるものである。」

(44)「晉書載記曰、石季龍、勒之從子也。性残忍。勒爲聘將軍郭榮之妹爲妻、季龍寵惑優僮鄭櫻桃而殺郭氏、更納清河崔氏、櫻桃又譖而殺之。櫻桃美麗、擅寵宮掖、樂府由是有鄭櫻桃歌。」

(45)注(15)小川『概説』三九頁「たとい樂府題を取らなくても、樂府の詞によってかつて歌われたような情景、情調を指示することがある。「古意」というたぐいの題がそれである。」と述べるのを援用できようか。

(46)「ただもちろんこの場合は、士人描写詩とは違い、言語化された一次テクスト(説話文獻)を二次テクスト化し言語化している。」

(47)もう一例として「王母歌」を掲げる。「武皇齋戒承華殿、端拱須臾王母見。霓旌照耀麒麟車、羽蓋淋漓孔雀扇。手指交梨遺帝食、可以長生臨宇縣。頭上復戴九星冠、總領玉童坐南面。欲聞要言今告汝、帝乃焚香請此語。若能鍊鍊魄去三尸、後當見我天皇所。顧謂侍女董雙成、酒闌可奏雲和笙。紅霞白日儼不動、七龍五鳳紛相迎。惜哉志驕神不悅、歎息馬蹄與車轍。複道歌鐘杳將暮、深宮桃李花成雪。爲看青玉五枝燈、蟠螭吐火光欲絕。」なお唐詩で西王母を主要な登場人物としたものに、例えば、韋應物「王母歌(一作玉女歌)」(卷一九四)、同「漢武帝雜歌三首」其一(卷一九五)、韓愈「讀東方朔雜事」(卷三四二)、曹唐「漢武帝將候西王母下降」「漢武帝於宮中宴西王母」(卷六四〇)などがある。

(48)西晋・張華『博物志』(『太平御覽』卷八〇三・珍寶部二・珠下)「博物志曰、鮫人從水出、寓人家、積日賣絹、將去、從主人索一器、泣而成珠滿盤、以與主人。」／東晋・干寶『搜神記』卷十二「南海之外有鮫人。水居如魚、不廢織績。其眼泣則能出珠。」／梁・任昉『述異記』卷上「揚州有鮫市。市人鬻珠玉而雜貨鮫(鮫)布。鮫人即泉先也。又名泉客。」「南海出蛟綃紗。泉先、潛織、一名龍紗。其價百餘金。以爲服、入水不濡。」「南海有龍綃宮、泉先織綃之處、綃有白如霜者。」／同『述異記』卷下「南海有鮫人室。水居如魚、不廢機織。其眼泣則出珠。晉木玄虛海賦云、天琛水怪鮫人之室。」

(49)李頎の時代における稗史小説の読まれ方、通行の状況を精査する必要がある

ろうが、卷子本の時代において、多くの知識人が類書や総集によって前代の詩文や小説を受容していたことは間違いないであろう。興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』(汲古書院、一九九五年)の興膳「解説」では、抄書、総集、類書について説く末尾で「卷子本という形體上の制約が前提条件となつて、簡便で効果的な讀書法を可能にするための書物が追究されることにもなつた」とする。

(50)『文選』の訓読と訳文は、原則として小尾郊一『文選(一)』『同(二)』(集英社、一九七四年)に従う。

(51)ちなみに注(47)所引『述異記』(卷上)に「南海有龍綃宮。」とある。

(52)「韓愈の詩のなかの二、三の人間像をめぐって」(『終南山の変容―中唐文學論集』、研文出版、一九九九年)。

(53)もう一例は、曹植「七啓」(卷三四)「弄珠蟬、戲鮫人。」

(54)劉孝威「小臨海」「蜃氣遠生樓、鮫人近潛織。」(『樂府詩集』卷五五・舞曲歌辭四)。

(55)李嶠「太平公主山亭侍宴應制」(卷六一)「龍舟下瞰鮫人室、羽節高臨鳳女臺。」／孟浩然「登江中孤嶼贈白雲先生王迥」(卷一五九)「鮫人潛不見、漁父歌自逸。」／儲光羲「采蓮詞」(卷一三六)「浪中海童語、流下鮫人居。」杜甫詩の用例は注(56)。

(56)杜甫詩では、「漢陂西南臺」(卷二一六)「想像識鮫人、空蒙辨魚艇。」／「奉同郭給事湯東靈湫作」(同)「鮫人獻微綃、曾祝沈豪牛。」／「閬鄉姜七少府設醴戲贈長歌」(卷二二七)「河凍未漁不易得、鑿冰恐侵河伯宮。饗人受魚、鮫人手、洗魚磨刀魚眼紅。」／「兩四首」其四(卷二三〇)「神女花鈿落、鮫人織杼悲。」

(57)鮫人説話を綴った賦には、貞元の進士・馮宿「鮫人賣綃賦」(『全唐文』卷六二四)、乾寧の進士・徐寅「鮫人室賦」(『同』卷八三〇)がある。

(58)前稿ではそれを明示できずにいた。また前稿で明示できていないものに、川合「杜陵野老」―杜甫の自己認識―(『中国文人の思考と表現』所収、汲古書院、二〇〇〇年)がある。



## A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati (Addendum)

Yoshiharu KAWAGUCHI  
(Chinese Literature)

### Abstract

This article is an addendum to my articles “A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati (part 1~4).”

This paper aims to investigate the reason why Li Qi 李頎's poems representing High Tang Literati are so interesting. It considers the idea that the interest can be attributed to the contiguity of the relationship between the primary text and the secondary text. In this case, the primary text refers to the literati living at that time who are represented in Li Qi's poem, and the secondary text refers to Li Qi's poems, which represent the literati. In addition, it is important to note that the secondary text (Li Qi's poems) is verbalized in contiguity with the primary text (the literati).

This explanation may be difficult to understand, but an example can make it clear. Cheng Zhangfu 陳章甫 is a High Tang literatus about whom Li Qi and Gao Shi 高適 composed poems. In these poems, they described Cheng's erudition (Gao Shi composed “有時生才傑, and Li Qi composed “腹中貯書一萬卷”). Gao Shi's representation is comparatively abstract; on the other hand, Li Qi's is more figurative. This paper calls the characteristic seen in Li Qi's poems the contiguity of the relationship between the primary text and the secondary text.

However, there is one problem with the above consideration; that is, the primary text cannot be fully verified in the present day, because it refers to a man living in the past who no longer exists. For this reason, this paper uses another type of poem by Li Qi that is composed based on a narrative. A narrative is a document, so it can be verified in the present day. This paper focuses on the poem that describes the Jiaoren 蛟人 narrative. In this case, the primary text is the document, that is, the Jiaoren narrative, and the secondary text is Li Qi's poem that represents Jiaoren. Through comparing the poem with the document (the Jiaoren narrative), that characteristic—the contiguity of the relationship between the primary text and the secondary text—is confirmed. This must be an example of supporting evidence, suggesting that Li Qi's poems representing High Tang Literati exhibit the same characteristic.